

土

淨

號 月 八



昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十八年七月廿日印刷納本・昭和十八年八月一日發行

第九卷 第八號

安西覺承著

新刊 法然上人の和歌

B 6 版六十四頁 定價五十錢 送料四錢

まことにわが祖法然上人は天成の歌人であられた。そのお歌はどこまでも歌としての美しさに輝く歌である。調子のよさ、格律の正しさ、技法の緻さ——實に立派な歌品であつて、優にこれを當時の一流歌人の勞作に比することができよう。(著者の言葉)

法の歌によく上人御遺徳の結晶をみる。

み詠こそ上人のお姿であり、み教へてある。上人の御作として確實な和歌全部(二十首)について一々懇切な語意、通釋、感想をのべ、金玉の詞花がそのまゝ讀者のものとなる定本である。

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

陸海軍病院 慰問「淨土」應募のお勧め

白衣の勇士に

法味を捧げよ!

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月新刊の信仰雜誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士に法味を捧げ、大變喜ばれてゐます。

◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。振つてこの聖き運動に隨喜して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務變部宛に! 領收の證には宗報及び「淨土」の誌上に御芳名を掲載します。

◇多數の陸海軍大臣の感謝狀、勇士からの謝狀がこの意義ある運動の全貌を語つてゐます。

申込所

淨土宗務所

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京一五一一一番

淨土八月號 目次

表紙・目次カツト……………河村良孝

本誌百號を迎へて……………真野正順・(二)

哨戒飛行機に耳澄ます……………山田靈林・(六)

生死關頭……………吉田絃二郎・(六)

空の騙し舟……………佐藤賢順・(一〇)

世界の騙し話……………北林透馬・(三)

雜事覺え帖……………子母澤寛・(三)

戰爭と子供達……………代田重雄・(九)

周作の一夜傳授……………編輯部・(五)

佛舍利を迎ふ……………編輯部・(五)

信仰相談……………編輯部・(五)

歌壇……………岩野喜久代選・(元) 漫畫斷けは涼し……………漫畫協團・(七)

俳壇……………太田耳動子選・(元) 忠犬の斷食……………(三)

宗教漫筆……………とんちん物語……………糸山天真・(四)

法語解説……………求道の心即ち信心……………中村辨康・(元)

法然上人御法語

問ていはく、聖人の申す念佛と、在家のもの申す念佛と、勝劣いかむ。答ていはく、聖人の申す念佛と在家のもの申す念佛と、功德ひとしくして、またくかはりあるべからず。



編輯 後記……………(三)



本誌
創刊
百號を迎へて

眞野正順

「淨土」が本號を以て百號に達したと聞くと、さすがに一つの感慨なきを得ない。

創刊の頃の慌しい喧噪さが夢の如くに浮ぶ。しかしそれもすでに九年の昔になつてしまつたのである。この事業の出発は内外の順適に恵まれて、極めて華やかなものであつて、何か爆發したものゝやうであつたから、それだけ、關係者としては却て「命短き」の憂ひを眞面目に懷かざるを得なかつた。それで復た、かへつていろいろ氣使ひを増したものであつたが、その後、二年三年、その憂ひも杞憂と消え、ヒタ動きだにせぬ堅實な歩武を以て、堂々たる躍進をつゞけ今日では押しも押されぬ存在となつてしまつたが、思へばすべて夢の如くである。

もつとも、私などはこの百號の三分の一にもまだ達せぬ内に、意氣地なくも落伍してしまつた者だから、この盛況に對し何等語るべ

き資格はないが、しかしかうして傍に手を拱ねて傍觀させて頂いて居たので、かへつて、この「百號」發展の足取の跡が鮮かに目に見え、その間これを支持して下さつた様々の御力の一つ一つが忝なく印象されたことも事實だらう。吉田紘二郎先生や佐藤春夫先生の始終倦むことを知らぬ暖かい外護や、中村辨康氏の不屈の健闘などを中軸として、其他擧げつくし難い多くの方々の恩力が、夏雲のごとく、積み合ひ、重なり合ひ内外ひしめき合ふごとく、この事業を保持し育成してきて下さつた。はじめ無謀に近かつた此事業の企てを顧れば、むしろ、これは不可思惟の結果である。

私は、今はむしろこゝに、この事業とこの「國土」この「時代」とに連なる深重なる因縁を思ひ何かしら知らぬ感激に促がされて目に見えぬものゝ前に深く頭を垂れざるを得ないのである。

本誌創刊の時、あたかも、久しく我國の上下を瀾漫してゐた歐米の風潮から豁然としてわが深嚴なる日本精神にかへらんとする自覺が萌し、まさに巨いなる轉回がこの民族の上に惹起せられ、しつゝある時であつた。本誌の誕生も亦たこの巨いなる民族轉回運動の一翼として立つたに外ならなかつた。

偉大なる、聖法然の出現以後、この國土の淳風に應じて、あまねく、わが民族生活に滲徹しつゝも、しかも幕府以來おぞましくも陰鬱なる葬祭の儀禮のかげに押込められ、或はまた輕佻なる近代思想の嘲解に蔽はれてゐたわが光輝ある念佛生活を、その獨自なる偉らかにして明るき本然の姿に取かへし、この民族大和を顯現する眞の因子たるべき代券を回復せんとすることこそ我等の果さんとする處



五月創刊號

法上人會發行

のもの
に外な
らなか
つた。
その後
支那事
變の突
發につ
づいて

次々に急激に展開しはじめた國運と共に、國民は絶えず惹起される窮乏なる状況の爆發と共に、窮乏なる展望の前に引出され、その度び毎に、否應もなく全身を擧げて革新轉回すべき「決斷」の淵に投げ入れられた。そして脱皮の上に脱皮を重ね、鍛鍊の上に鍛鍊を重ねしめられつゝ、次第にその汚結を淘汰して、大和民族本来の剛健なる身心を再獲得し、かくて、遂に、かの記念すべき偉大なる十二月八日を迎ふるに至つたのである。本誌百冊の健闘もまた、この線に沿ふて、國民の自己脱皮のために懸命なる協力奉仕を續け來つたことは我親愛なる讀者各位のすでによく知悉したまふ所であらう。

今やわが民族はその全部を擧げて、足音高く踏み鳴しつゝ、その永遠の聖務たる新理想世界をこの眼前に顯現すべく、汗に塗れ血に塗れつゝ進み進んで止まぬ。この莊嚴なる民族行進に對し本誌はもとよりその先頭に燎めく旗幟でもなければ、また群中より疾呼する號令でもない。そうでなくてむしろこれを警ふるならばかゝる大行進の道に沿ふた山陰の巖壁に、音もなく滴りおちる清冽なる岩清水にも似ると云ふことが出来やうか。塵にまみれたる行人は、こゝに來て暫しの汗をおさめ、一掬の清涼を喉に通はすことによつて全身の氣息を新らしく蘇らす。その如く本誌は、行進の土をして、しばらく爽やかなる空氣の下に、その本然の自己に還らしむることに依つて、その生氣を全く新たならしめんとする。清水の味には、舌を迷

はすごとき甘味もなくまた興奮せしむべき刺激も含んでゐない。かかる人爲の一切の加工を去つてたゞ淡々無味、役無きが如き自然である。

然も、かゝる淡々たる自然なるが故に、それによつて人として眞に本来の自己にかへらしめ、全く新たに全身の氣息を蘇らしむる。

その如くまた法然上人の道もまた自然である。人をしばしその本来の素地にかへし、人生最後の基礎に安んぜしむる事によつて、亂戦の中に再び蘇生し、惡闘の後に再び勇氣を新たにす。即ちそれは内心に無限の温かき光明の充溢を覺えつゝ、外にふたゝびこの民族のための獻身にわが全身を投げ出して悔ひぬのである。寂光のものと一たび本来の自己に醒め來ればかゝる獻身の奮闘裡において外に自己の眞の故郷は無いからである。

この百號の機會にあつて、私はまた、これまで全く表面に現はれなかつた存在として、創刊以來本誌の編輯實務にたづさはり、獨特なる「淨土」の様式の創出に力あつた道瀬幸雄君や、現在の潑刺たる編輯者村瀬秀雄君などに對しあらためて深い感謝の意を表したいと思ふ。(寫眞は創刊號表紙)

陸海軍病院「慰問淨土」 寄附者芳名 (敬稱略)

- 三十圓 千葉縣富浦町多々良 和田正系 ○三十圓 東京市深川區永代一ノ十八 正源寺報恩會 ○十五圓 福島縣安積郡福良村武藤謙象 ○十圓 岐阜縣養老郡笠郷村船附生蓮寺 川瀬了道 ○十圓 佐世保市元町一 富田等平 ○十圓 東京市世田谷區北澤三丁目九九八 住本昇三郎 ○五圓 和歌山市今福二七 白樫芳次郎 ○五圓 鳥原市中堀町 益富徳昌 ○五圓 愛媛縣伊豫郡松前町大念寺壇徒兵頭福松 ○四圓 山口縣熊毛郡阿月村和田 下松勝滿 ○四圓 東京市中野區住吉町四三 清水喜三郎 ○三圓 三原市須波町地福寺 横山元幸 ○三圓 東京市淺草橋二ノ十九 野田くまゑ ○二圓 東京市大森區久ヶ原町七九七 稻穂澤二 ○一圓五十錢 東京市本所區厩橋三ノ二五 菅原誠二 ○一圓五十錢 同市中野區本町通四ノ二五 平田恒太郎 ○一圓五十錢 同市淺草區吉野町二ノ二久保西光庵 日比信道 ○一圓二十錢 同市淺草區吉野町二ノ二植田正太郎 ○一圓二十錢 同市品川區南品川五ノ一四二 城山武彦 ○一圓 神戸市神戸區元町四ノ三四 長谷川吉次 ○一圓 愛媛縣伊豫郡松前町大念寺壇徒 粕谷三太郎 ○一圓 同上大念寺壇徒中野亦良 ○一圓 同上大念寺壇徒 北井俊三

「タイ」國から

佛舍利を迎ふ

昨年廣田大使が渡泰した際に泰國から同じ佛敎を修奉する日本國民に佛舍利を贈呈したといふ申出があつた。かくして盛大なる佛舍利贈呈式が彼の國に於て舉行され木邊男爵外二名がこれを捧持して飛行機で歸國した。七月十七日十三時三十分東京驛に到着した佛舍利は、直ちに使節團、佛敎會役員に守られ、東京佛敎團挺身隊百名、學生生徒千名等の隊列を隨へ、音樂隊、鼓笛隊の奏する樂の音に合せて二重橋へと行進、宮城奉拜をなした。次いでそのまゝの隊形で馬場先門から芝公園へと恭迎式の擧げられる増上寺に向つて行進した。増上寺には早くから各團體役員、代表等二千名が出迎へられ、佛舍利は式衆童子が先導して近來稀れにみる大恭迎列繪巻を展開した。恭迎式は青木大東亞大臣、酒井佛敎會長、デイレック泰國大使の各挨拶があり、引續いて郁芳淨土宗管長導師となつて嚴肅

莊嚴極まりない大法要が擧修された。この泰國々民からわが國民に對し兩國親善の最高意志表示として贈られた佛舍利は、まことに由緒あるもので泰國國民としては最も尊敬を集めてゐたものであつた。

今から百七十八年前まで首府であつたアユチャは、佛敎國にふさはしい無數のバゴダがあつた。しかもそのアユチャのバゴダの中には何れかに佛舍利が安置されてゐるといふ傳承があつたのである。しかもその佛舍利は今から約六百年前の國王であつたバロム・トライロカナートの時にセイロンから特に奉還したものであるといふことが五朝史記によつて明かなのである。當時泰國とセイロンとは佛敎を通して盛んな往來があり、熱烈なる佛敎信者トライロカナート王が出家した時も、セイロンから王の得度のため高僧マハ・スワミがわき／＼來たのであつた。セイロンは阿育王時代から佛敎國として有名であり、印度佛敎が衰微してからはセイロンが佛敎の中心となり、從つて印度から佛舍利が來てゐたので

ある。この佛舍利を奉じてマハ・スワシが王の得度に奉じしたのである。時に皇紀二千二百二十五年のことであつた。

この王の死後王子の發願によつてアユチャに一大佛塔を建立して佛舍利を安置した。ところがアユチャが廢墟になるや、安置した佛塔も何のバゴダなのか不明になつてしまつた。歴代の泰國政府はこの佛舍利を發見しようとなつてきた。發掘は長年に亘つて次々と繼續された。それで遂に皇紀二千五百九十二年二月十五日發見されたのである。佛舍利は水晶の卒塔婆の中に安置された。その水晶の卒塔婆は更に黄金の卒塔婆の中にあり、更にその上は二重に白銀の卒塔婆があり更にその上は二重に黄金の卒塔婆があり更にその上に鐵が張られ、鉛製の壺に入れられてゐた。この八重の卒塔婆が數百の佛像と共に地下深く煉瓦と石灰岩に圍まれた寶龍の中に安置されてゐた。泰國國民の尊敬の中心となつてゐるこの佛舍利が今や我々の目で直接禮拜出来ることゝなつたのである。



生 死 關 頭

吉 田 絃 二 郎

生死といふ問題はいつの時代の青年にとつても第一義的なものである。高山樗牛が廣瀬川の畔に立つて天地の悠久に對して感慨に耽つたといふことも、青年ニイチエが伊太利に旅してアルプスの山嶺に付んで、萬有流轉の眞相に胸ををどらせたのも、齊しく、生死の問題に對する青年の純一なる疑惑であり、精進である。

いつの時代にも青年は生死の問題について眞剣である。ましては今日のやうに、明日にも戰陣の蒼に駆けつけなければならぬ境遇に在る青年たち、現に第一前線に在りて、死生關頭に在る人たちにとつて、生死の問題は、何時の時代よりも一層實際的問題として、多くの青年たちの最大關心事であるにちがひない。

死後は奈何といふこと、死とは何ぞやといふやうなことに對しての解釋は、いろいろの人々に依つて昔か

ら説かれたことであるが、わたくしたち凡夫としては死はたしかに悲しいことである。いかに宗教的な修行を重ねても死の悲しみから救はれる筈はない。釋尊も舍利弗の死に面しては涙を流してをられる。悟ればこそ人一倍に死を悲しむ心も湧く。

悟るといふことゝ、死を悲しむ心との關係はかやうなものであらう。

哲學を學び、宗教に精進することは決して人間の悲しみを淺くするためでなく、實は人以上に悲しみを深くするためである。その悲しみに面して、この嚴かな人生の一大事を、淺く、かりそめに、通りいつべんに済ませてしまはうとする世俗的な物の感じ方から擺脫して、死の悲しみのどん底に徹して嚴肅な人生を靜觀し、生き貫いて行かうとするのである。



しかしこゝに考へなければならぬことがある。死は人生の最大悲劇であるにちがひないが、死は同時に人生の最大、最高の表現であるといふことを忘れてはならぬ。

一生涯を黙々として生きて行つた無名の一凡夫、一愚婦に過ぎなかつた人々が、靜かに念佛合掌して大虚に還つて行く姿に接した時、誰れが死を空虚と呼ぶことができよう。誰れが死んで行く人たちを凡夫と呼ぶことができよう。わたくしたちはあの嚴肅な臨終に接した刹那、はじめてまことの生の姿を見出す。あの人たちは死んだのではない。眞のいのちに還り行くのである。生の第一關門が開かれたのである。

死の刹那、一切の無智からも、慾念からも解脱して、かれらは菩薩となり、佛となるのである。人間は死なないかぎりは菩薩にも、佛にもなることはできない。死は人生の最大事であり、最高の行事である。

わたくしたちは死を悲しみ、死を思ふことによつて、念々、人生を尊く、ありがたく、嚴かに生きなければならぬ。しかし死にこだはつてはならぬ。死は生そのものであり、死は生の極致であることを考ふれば

死にこだはることはなくなるであらう。死についての悟りである。

かりそめの旅立ちする人を送るにすら、涙を誘はれるのが人情である。ましてや、現身としては永劫の鹿島立ちであるところの死に對しては涙なきを得ない。しかし生まれて來た刹那死は約束されてある。死があればこそ人は永遠の若さに生きることができるのである。

死の問題を解決しようとする若い人たちが、いろいろの説を聴き、いろいろの本を讀むであらうが究局の解決はその人自身の精進にある。その人自身の悟入にある。山上の雪の美しさ、山嶺の星夜の崇嚴さは身親しく、一步、一步嶮岨を攀ち登つて行つた人でなくてはわからない。

親に別れてはじめて親を失つた悲しみを知る。妻子を失つてはじめて妻子を失つた悲しみを知る。自分の死に直面してはじめて死生觀に惑ふ。道は遠い。

しかし死の解決は存外近いところにあるであらう。智慧第一の法然上人は一切經を幾度かくりかへしてお讀みになつた。しかも最後のお悟りは一文不知のとも



がらとなつて念佛(ねんぶつ)をすといふことであつた。
 葉隠(はげん)には武士(ぶし)の戦場(せんば)の死(し)ほどありがたいものはない。
 い。疊(たたみ)の上(うへ)で苦し(くる)み、醜(みにく)くなつて死ぬ(しぬ)のに比べ(くら)たら、
 戦場(せんば)で討死(うちしに)するほど果報(くわほう)なことではないと教(し)へてある。
 戦陣(せんじん)に在(あ)る人々(ひとびと)にとつて、うなづかるゝ言葉(ことば)であら
 う。まして、その人(ひと)の死(し)が祖國(そこく)の爲(ため)であることを考(かん)へ
 る時(とき)、その死(し)はまことに羨(うらや)むべきことである。

わたくしはかつて親(おや)しい者(もの)を失(う)つた時(とき)、一年(いちねん)二年(にねん)と
 つづけて死(し)の問題(もんだい)に關(かん)する書物(しよぶつ)ばかり讀(よ)んだ。しかし
 わたくしの悲(かな)しみは少(すこ)しも癒(い)されなかつた。
 或(ある)る日(ひ)わたくしは何氣(なにげ)なく徒然(つれづれ)と讀(よ)んでゐた。そ
 して「人は四十(よじ)ばかりに死(し)することめやすけれ」と
 いふ一句(いちく)を見出(み)出した利那(りな)、豁然(ごうぜん)として明(あ)かるい世界(せかい)が
 切り拓(ひら)かれたやうな氣(き)がしたことがあつた。

わたくしたちは二十年(にじふねん)で死(し)ぬことゝ、五十年(ごじゅうねん)で死(し)ぬ
 ことの間に、三十年(さんじゅうねん)の差別(さべつ)を置いて考(かん)へずにはをれな
 い。しかし三十年(さんじゅうねん)も七十年(ななじゅうねん)も草(くさ)の露(つゆ)である。こゝを考
 ふればこゝにも一つの悟(さと)りはある。

百年(ひゃくねん)もたゞ一日(いちにち)の積(つ)み重(かさ)なり過ぎ(す)ぎない一日(いちにち)もたゞ
 一朝(いちよう)のことに過ぎ(す)ぎない。一朝(いちよう)もたゞ草(くさ)の露(つゆ)に過ぎ(す)ぎな

い。さすれば百年(ひゃくねん)生きるも一朝(いちよう)生きるも、あなたまか
 せでよい筈(はず)である。こゝにも一つの悟(さと)りがある。

百年(ひゃくねん)生きる人も俗腹(ぞくはら)を洗(あら)ふことができなければ畜生(ちくじやう)
 に過ぎ(す)ぎない。幼(こ)くして死(し)に、若(わか)くして死(し)んでも父母(ふぼ)を
 よろこばし、人(ひと)に尊(たっと)く思(おも)はれる生き方(かた)をした人(ひと)は千年(せんねん)
 の壽(ことほ)を保(たも)ち、不滅(ふめつ)のいのちに生きるのである。

花(はな)は一日(いちにち)にして散(ち)り、露(つゆ)は一朝(いちよう)にして落(お)つる。しか
 も、何(なん)の未練(みれん)氣(き)もなく散(ち)り、嬉(うれ)々として大地(だいち)に還(かへ)る。

南溟(なんめい)の空(そら)に敵(てき)を撃滅(げきめつ)しつゝ敢然(かんぜん)として彈幕(だんま)をくゞ
 り、嬉(うれ)々として敵艦(てきかん)上に自爆(じばく)しつゝあるわが若(わか)い勇士(ゆうし)
 たちの最期(さいご)こそ、わたくしたちに死(し)の問題(もんだい)の解決(かいけつ)を暗
 示(あんし)する神(かみ)の聲(こゑ)である。

讀者のたより

◇確(たし)かなる信仰(しんぎやう)により希望(きやうばう)と光明(くわうめい)の輝(かがや)きたる感激(かんじき)
 に「淨土(じやうど)」を讀(よ)ませて頂(いただ)いてゐます。皆々(みなみな)様の御芳(ごほう)
 情(じやう)御高恩(ごこうおん)に報(むか)へるべく心(こゝろ)も身(み)體(てい)も美(うつく)しく保(たも)つやう努
 め、又(また)友達(ともだち)にも大(おほ)きな聲(こゑ)で「淨土(じやうど)」の結構(けきこう)を申し
 傳(つた)へてゐます。(神(かみ)職(しやく)市(し)林(りん)田(た)區(く)寺(じ)池(ち)町(ちょう)中(なかつ)本(ほん)代(だい))
 ◇陸海軍病院(りくかいぐんびやういん)に慰問(ゐもん)雜誌(ざし)として貴誌(きし)御後送(ごごそう)の由(よし)、實
 に結構(けきこう)な御趣旨(ごしゆし)と感激(かんじき)いたし、甚(いた)だ輕少(けいせう)にてお恥(はづ)し
 き次第(さいだい)ではあります。御趣旨(ごしゆし)の一端(いちたん)にも加入(かじ入)下(くだ)さ
 らば幸甚(さいじん)の極(きよく)みと存(ぞん)じ送金(そうきん)致(いた)しました。何卒(なんぞ)戎衣(じゆい)の
 身(み)の微意(ゐい)を御了察(ごりやうさつ)下(くだ)され御笑納(ごせうなつ)の程(ほど)願(ねが)ひます(比島
 派遣(へんぱん)〇〇〇部隊(たうたい)澄哉(せうさい))

戦争と子供達

代田 重雄

「みんな仲良く遊ぶであらね……」

私は通りがかつて子供達に言つた。十坪ぐらゐしかない空地で遊ぶ子供達は私といつも顔馴染みで、すぐに「小父さん」と傍にやつてきた。陽の強いある朝のことである。

「みんな大きくなつたら、何になるね？」

別に云ふべき言葉もない私の質問である。

「僕は海軍の兵隊さんになるんだアイ」

七つになる勝ちやんが突然元氣にかふ答へた。どうだい偉いだらうといふ顔である「僕

も」僕も「僕も海軍の兵隊さんになる

んだッ」他の子供達も一勢に叫んだ。これは勝ちやんの眞似といふより、子供達の小さい

心の中には誰も、いまかうした希望を持つてゐるのだと私は思つた。

「僕は飛行機に乗るんだッ。そして軍艦から

飛び出したら歸つて来ないよ？」

勝ちやんは再びかう云つた。静かに澄んだ

眼と抑揚のある言葉が一層眞剣なものにした。

「自爆だッ、アメリカの軍艦にぶつかつて死

んぢまふんだらう？」

初等科一年生の壮吉君が大きな眼をしてそ

ばからかう云つた。私は無言のうちに思はず胸があつくなつてきて、眼がしらに泪がにち

んで来るのを何うすることも出来なかつた。

すると、またひとりの子が聲をあげた。

「僕だつて歸つて来ないや、勝ちやんなかに

に取つてたまるもんかッ」

「僕だつて、取けないぞ」僕だつてッ」

六人もゐる子供達が眼をかとやかし、勝ち

やんに挑みかゝるやうに云つた。

「ね、小父さんだつて飛行機で飛び出して行

つたら、歸つて来ないだらう？」

私は突然の質問に面喰つてしまつた。子供

達は私の言葉を得つやうにデッと見てゐる。「うん、小父さんだつて歸つて来るものか、

憎ッくいアメリカの軍艦にぶつつかつてやるんだッ——」

思はず私は握りこぶしをこさへた右腕をグンと子供達の前に突き出した。

「うわア、すごい、うわーい」

子供達は満足したやうに喚聲をあげた。私の

身體に體當りをくれて走つて行つた。

「みんな偉い。今の言葉を忘れずにナ」

私の心には何んとなく満ち充ちた喜びがわき上つて来た。子供達のいま考へてゐること

そしていま云つた言葉……。

決戦に次ぐ決戦がもたらした銃後の國民の決意はこんな子供達の心の中にまでも泌みと

はつてゐるのだ。何んといふ心強さであらう。私達の後から来る子供達の心の中から、

こんなすばらしい聲を聞くと、いまの今まで私は想つてゐなかつた。

——子供達よ、みんなすく／＼と大きくな

つておくれ、おまへ達と一緒にもつと／＼日

本を強くしよう——私は無心に遊ぶ子供達の

姿を眺めながら、心にかう云つた。



騙し舟

佐藤賢順

私は前回まで「空の世界」を講じてきて、空を絶對者、全體者などといふ言葉で言ひ表し、その積極性を示してきた。但し、空をかういふ言葉で表したからといつて、それに少しでも有限的存在性といふやうな聯想が附き纏つてはいけないから、綜合的聯關などといふ言葉も使つてきた。また綜合的聯關といつたところで、それは機械的な諸關係の綜合だと誤解されてはいけないから、生ける流動的聯關などといふ言ひ方をしなければならぬ場合もあつた。それならば、そのやうな生ける絶對者が如何にしてこの相對的な有限者たる自分の上に現れるか、また逆に言へば、自

我は如何にして自らの眞の相である絶對者へ還ることが出来るか、といふことが宗教上の實際の問題になつてくる。

その時、重要な役目をするのは否定といふ働きである。否定とは自らの相對性・有限性の否定である。自らの相對性や有限性がどうして否定されるかといへば、他の同じやうに相對的・有限的なものと對立の關係にあることが氣付かれるとき、兩方の相對性・有限性が否定される。然しその否定は、兩方の相對性・有限性をただ否定するだけでなく、前にも述べた通り、否定が同時に肯定の働きであつて、獨立した存在だと誤まつて考へられて

あるものを、その本來の廣い聯關に戻して、絶對者の光に於いて見直すことである。否定といつても、個々の有限的存在を捨てて顧みないのではない、それを意味あるものとして見直すのであるから、包越とでも言つた方がよい。とに角、對立に於いてあると氣づくことが、包越の足掛りになる。

龍樹が「有を離れ、無を離れ、非有非無を離れ：…能く善道（中道のこと）を行ずる。」と言つてゐるのは、この包越の過程を具體的な形式で示したものである。ここで有と無は對立であつて、包越されて非有非無となるが、非有非無もまた非々有非無と對立する。だからこの對立もまた包越される。かうして百非を絶すなどといつて、この包越の過程は、百の非を重ねるも、まだ表し切れないとされてゐる。否定すなはち空する過程はそれほどに無限の過程であり、永劫の修行である。自我の擊破、有の碎破はそれほどに困難な修行である。龍樹が「有はこれ一邊、無もこれ一邊なり。…我もこれ一邊、無我もこれ一邊な

り。兩邊を離れて中道を行ず。」と言つてゐる通り、我を打ち破つたつもりの境地たる無我さへも、大方は自我に對立する無我であつて、まだまだ幾度も越え出でられねばならぬ心境である。兩邊とは對立のことである。

× × ×
 女の子が折紙で帆かけ舟のやうな形の舟を折つて遊んでゐるのをよく見かける。眞ん中を持つてゐらつしやい」と相手に帆を持たせ目をつぶらせて、臆に當る所を折り返すと、帆はいつか舳に變つて、眞ん中を持つてゐた筈だつたのが、端になつてゐる。はじつこを持つちや駄目よ。眞ん中を持つてのよ。」と言はれて、相手は溫順しく眞ん中を持ち代へる。また折り返されて、いつか眞ん中が端になる。といふ遊びで、舳し舟といふのださうだが、騙され役も騙されることを承知で目をつぶつてゐるところが、女の子の遊びらしくて面白い。

私はここに、否定、包越の過程が暗示されてゐる氣がした。ここに中道實相の教が示唆

されてゐると思つて微笑ましくなつた。中道を掴んだと思つてその境地に安住してゐると、いつかそれは對立の一邊に墮して、有限性の束縛を身に受けねばならない。暫くも苟安は許されない。空は無限に成長する發展でなければならぬ。騙し舳の遊びはいつまでたつても同じことの繰り返しに過ぎないけれども、包越はその度毎に高まり深まりゆく進行であつて、かうして對立の包越を繰返してゐる間に、有限者は次第にその眞の本質である絶對的聯關の中に還つてゆくことができる。

× × ×
 非有——非無——中道といふのは、否定の道筋を示す公式であるが、空——假——中といつてもよいし、西洋流に辯證法的形式といつてもよい。必ずしもかういふ公式で示されるとは限らない。であるから形式ばかりに拘泥するのは、空の世界觀に於いては最も愚かなことであるといふべきである。初めに形式

があつて、行觀をそれに當て嵌めるのではなく、實踐が先にあつて形式は後から生れてく

るのである。あるがままの相に隨順する眞の生活の深まりゆくにつれて、否定の道筋の形式が出来上つてくる。あるがままの相に敬虔に隨順することが、まづ何よりも大切であつて、ここに眞の宗教生活が生れてくる。絶對者への心からなる隨順であり歸命である。

先に私は絶對者を、機械的諸關係の綜合でなく生きて動く聯關であると假りに表現したが、生きてゐることを今はつきりと把握しなければならぬ。それは生命とか人格とか慈悲とかいふ言葉で表はされるのが普通で、勿論このやうな言葉以外には言ひ表しやうがないが、もしそれが私どもの生命や人格をも基として、それをそのまま投影するならば、これがまた危険なことである。なぜなら否定とか包越とかいふことは、さやうな生命の個別性・有限性の否定、包越に外ならなかつたのであるから、そのやうな言葉はただ比喩的・象徴的意義を持つだけである。



雜事覺え帳 (續)

子母澤 寛

福原又四郎は、まだ廿一の青年だが、かねて雅樂が云ふには、自分の最後に萬一の醜體でもあつては、武士末代の恥辱だから、自分は切腹に際して介錯人の手を借れずに、一人で立派に死ぬ決心をしてゐる。お前は假りに介錯人にして置くが、跑送もそのつもりであるようにと申渡してあつた。切腹に自分一人で死ぬといふ事は容易の業では無いものゝようである。

だから又四郎は、檢死が早く首を打落すようにと催促の眼つきをするが斬らない。雅樂は、一人で死ぬつもりだが、どうも氣管をはづれたか、なか／＼呼吸が止まらない。又四郎は、雅樂がかねて自分に云ひつけたのは此時の事だと思つたので、雅樂が短刀を持つてゐる右手に持添へてやつて、再び咽喉へ突込ましてやらうとしたら、雅樂は、強い力で左の手をふつた。まだだ／＼、俺は一人で死んで見せるといふ意氣込をその時になつても失はない。しかし、どうもこうした悲壯な場面を見てゐる事はお互に堪らないであらう、又四郎は無理に手を添へて咽喉へ當てゝ、力一

ばいに突込ませたが、雅樂は、まだ／＼強性で、その手を左でばつとはねた。仕方がない

ので、頭を押さへて、前へ伏せさせて、それでやつと絶命したといふ。餘程の肚が出来てゐなければ、切腹もここ迄はやれないだらう

もう一つ内々の沙汰による切腹は、各藩によつていろいろの仕来りがあつたが、中には考へて見ればずいぶん殘酷なものも少なくなかつた。

その一つに伊豫松山の江戸詰で松田それがしといふものが、同僚の小島某に喧嘩を賣られて、赤羽橋で突然に斬りかけられたが却つてこれを刺止めて終つた事がある。

松田は悠々としめをさしてからその死骸へ馬のりになつて切腹しようとしたが、友人が

大勢一緒だつたので、とにかく此處は往來である。屋敷へかへつてからゆつくりとやるがいゝではないか、と止めたので、それもさうだといふので、松田は一旦歸宅し、家族や友人に暇乞をして、大勢の友人や家族の前で、切腹した。

それから自分で喉をはねて前へ倒れたが、倒れた後に「まだ死なぬ、まだ死なぬ」と二度云つた。一同が「御美事御美事」と褒めそやすと、はじめて、につこりして絶命したといふ。

ところが一方、この松田に斬られた小島は松田が止めをさしたにかゝはらず、死骸として運ばれて屋敷へ行つてから、夜中に、ふと眼を開けた。兄がその枕元に座つてゐるのを見て、「兄さんまだ死ねません」

といった。兄もびつくりしたが、すでに松田も切腹してゐる以上、このまゝ生かして置くといふ譯にも行かず、もし生かそうとしてお所詮は時の問題だから、今度は、實の兄が

刀をぬいて再び三度び、弟の咽喉を刺しぬき詰りは、弟を殺し直したといふ。

*

幕末に江戸市中取締をやつた庄内侯御預新徴組といふものは、相當な暴れものが澤山ゐたが、慶應元年十二月神田明神下で、馬で自分達の行列を突切つた永島直之丞といふ旗本を斬殺した。斬つたのは千葉雄太郎、羽賀年太郎、中村常右衛門の三人。

ところが斬つた事はいゝとしても裏金輪抜けの陣笠をかぶせたまゝで死骸を往來へ投り出してあつた事が問題になつてこの三人が切腹をしなくてはならぬ破目になつた。この陣笠は公儀直參の印だから、それを粗略に扱つたといふことは、取りも直さず、直參全體を侮辱し、徳川家を恥しめたといふのである。

旗本中からのやかましい掛合で、遂に三人切腹となつたが、事件から六日目に、麴町ちの木坂の組屋敷で腹を切る事となる。

羽賀は館林の武士だが、中村は根が甲州のぼくち打ち、祐天仙之助の子分である。しかし、いざ切腹となると、こうした渡世をしただけに思ひ切りもよく

「この世の別れに浴びる祝酒をのみたいがそれはならぬといふから、一つ金だらひに酒をなみ／＼と持つて來て貰ひたい、おれは、その酒で刀を磨いで腹を切るから」といふ。希望通りにしてやると

「どうもまた切れなくなつたようだし」そういつて、切腹の途中に、幾度も幾度も酒で刀を磨いでは、遂にお終ひまでやつたといふ。

*

やはり新徴組の天野靜一郎は、飯田町の仲坂下で一刀流の劍術の道場を開らいてゐた劍客だが、後ちに庄内へ行くといふ時に妻に子供が三人、妾にもやつぱり三人といふ譯だから、ひどくふところが苦しかった。それで一

先づ庄内へ行きはしたものの間もなく妾と子は江戸へかへし、どうやらこうやらやつてゐる中に、隊の規則を犯して、自分も庄内を脱走しようとして、それが知れて、却つて、情けで江戸詰を命じられた。

その恩も忘れて、江戸で押借をやつたといふので切腹を命じられたが、腹を切つてから、支配の頭に話があるから逢はせろ／＼とせがみつゞけて、とう／＼根が盡きて絶命した。實に未練な死方だつたらしい。

そこへ行くと、それから少し後に同じ隊の桂田寛吉の切腹などは悠々たるもので、家族は全部外出させ、友人に立會はせて、先づ腹の皮をうすくすう一つと切つておいて、辭世をよんだ。それがまた實に秀句だ。

すぐに切る腹なでゝ見る寒さかな。

木枯やしがらみもなきぜの音。

それから、喉をやつて絶命したが、これは近江の郷士で時に卅五、範永と號し俳句はうまかつた。名句として残つものに

「秋たつやけさ板の間のふみごころ」といふのがある。切腹の原因は、隊の方針に反對の行動をとつたからで、この事件は俗に庄内のワツバ事件といふ有名なものである。新徴組が江戸を引揚げる時に幕府から三萬兩下賜金があつた。後ちにこれが庄内侯へ下さつたものか、新徴組へ下さつたものか議論になつた。組の人達は、ワツバ（飴などの入る薄板の曲げもの）へ入れて配分せよといふ、藩廳では當方のものだといふ。それでひどい騒動になつたのである。桂田は隊士であつて、藩廳の主張に賛成してゐたのである。

國債を買ひませう

もう一機！ もう一艦！

▽國債、債券を買うことは航空機、軍艦、彈藥、兵器の増産に直接に貢獻することです。

▽つまり、にくむべき敵米英に加へる鐵槌を握つたことになるのです。

▽更にそれは生活を切り下げることになるのです。切り下げただけの生活が聖戰完遂の物質力になるのです。

▽即ちそれは恐るべき高物價來（インフレ）を防止し戰時生活を安定させ、敵の思想戰に勝ち抜くと云ふ二重の働きを持つのです。

▽さあ國債を買ひませう！

病氣と藥師の本願

(問)

私の菩提寺の御本尊は藥師如來であります。藥師如來は一切衆生の病を除くことを本願として居るのに、何故に病人が絶えないでせうか。これは衆生の業報が拙い爲に如來の御利益に預ることが出来なからでありますか。

然し業報は衆生の持前です。この業報を救ひ得ぬならば如來の誓願は虚言となるのではないでせうか。戦時下皆が健康で働けますやう一切衆生の病を癒し玉へとお祈りしても、

その祈りの適ふのは稀れのやうです。之れは何うしたものでせうか

(京都府・園部・正木榮之輔)

(答)

藥師如來が衆生の病を除くことを誓願された

ことは「藥師如來本願功德經」などに出て居りますが、その本願に依つて病人がすつかり無くる筈で

あると考へるのは誤りであります。病氣をな

ほしたりお金を儲けさせたりするやうな宗教

は、皆な類似宗教であつて正しい宗教ではあ

りません。病氣になるにはなるだけの原因が

あります。その原因が除去されなければ病氣

は治りません。この病因除去法が「藥師法」

なのであります。化驗療法、物理療法、轉地

療法、轉心療法、因縁整理法、信仰整心法等

を綜合して治病するのが藥師法ですから、單

なる醫藥や看護法のみではありません。治病

法としては實に完全にあらゆる方法を講じて

居るのです。然るに何の努力もなく向ふの方

から勝手になほして呉れさうなものと考へて

居るやうな、そんな横着な人は非常時局の認

識も恐らく出来ないものでありませう。そんな

人こそコッピドク罰をあてた方がよいかも知

れません。

御質問のやうなそんな不合理を教へる宗教

は國家としても、存立を許して置けないでせう。然し佛教はそんなことを教へるものでは

擔 當
中 村 辨 康
(質問歡迎)

の根本を忘れて枝葉のことを氣にして居るのはあなたのお考へ違ひであります。

禁酒禁煙に就て

(問)

キリスト教では禁酒禁煙を叫んで居りますが、佛教時には淨土教では酒煙草に就て何う見て居りますか、御教示下さいませ。

また禁酒禁煙の不可能も信仰で可能となるでせうか。(長野縣・小野村・熊谷参市)

(答)

元來は宗教のお祭りに使用したものださうですが、高等宗教では何れも禁じて居ります。

佛教では、五戒の一つに「不飲酒戒」と云ふのがあり菩薩戒には「不沽酒戒」があります。煙草のことは出て居りませんが、酒に準じてよろしいでせう。

談相仰信

淨土教では「無戒名字比丘」でありますから、法然上人も「浮世の習ひ」と言つて居られます。御自身では、召し上がらなかつたけれども、一般の人々には大目に見て居られたのではないかと存じます。随つて特別に禁酒禁煙を叫んでは居りません。然し飲酒喫煙を賛成しては居りません。やめられ得れば結構です。

また禁酒禁煙は不可能ではありません。ですから信仰に依らなくとも誰にも出来ます。唯だ決心するかしないかの相違です。但し信仰に依つて誓ひを立てれば直ぐやめられるでせう。私も煙草を止めました。お酒の方は無い爲に頂いて居りません。止めたわけではありませんが、これは煙草より樂です。

虚假の目から

眞實が見えるか

(問) 「世間假化唯佛是眞」と云ふこと

を人から尋ねられました。一應は世間は假化であり佛様は眞實だとは思はれますが、假化の自分の認めた佛様が何うして眞なるかと聞き返へされて行きづまり困つてしまひました。ゆへ御教示に預り度うございます。何分ともよろしく願上ります。(紀州・一僧侶)

(答)

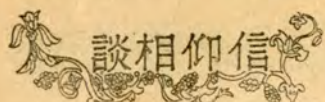
「世間假化」ではなく、「世間虚假」のお間違ひと存じます。之れは聖德太子妃 橘大郎女が聖德太子の薨去後その追悼の爲に「天壽國曼陀羅」の圖を刺繍で作られました。その繻張の記の中にある文句で、太子が日頃申された御言葉であると記されて居ります。随つて私達が眺めて云つた言葉でなく、太子自らが眺められた時、世間の一切は虚偽であつて實に一つも信用の置けるものはないが、佛のみは眞實で何の偽りもないと知られ給ふたのであります。ですから虚假の私達が眺めたのではなく、日本の聖法王でまします聖德太子が認められたものであります。ですから貴氏が質問されると云ふやうな貴氏御自身の見解ではないのであり

ます。

然し虚假の私達にしたつて佛の眞實が分らない筈はありません。虚假を虚假と知つたことは眞實の一分を知つたことであります。虚假を虚假と知り得るときは、やがてまた佛の眞實を知り得ることもなるので、そこには何の矛盾もありません。

また「佛」の本質は「覺醒」にあるのですから、虚假と知つたところ既に覺醒を得たわけ、虚假なるが故に眞實を知り得られるのであります。

若しその問者の言ふ如く虚假の知る眞實は虚假に過ぎない、虚假は眞實を絶対に知り得ないとするならば、永久にこの世の中に眞實はあり得ないのであり、且つ眞實なるものことさへ知り得ないのであつて、佛さへないことになるのであります。ですからこれは問者も間違ひであり、聞かれて行きづまつた貴氏も亦た問者と同じやうに間違つて居たわけでありす。



談相仰信

私事と公事との違ひ

(問)

鑽仰會發行「念佛讀本」に椎尾博士が「念佛を唯だ齒痛頭痛膏や火止雨請などにするのは餘りにも粗末な小事に局限するもの」と言つておられますが、盛夏連日の日焼に枯死せんとする稻田を見て、御國の非常時一粒の米でもと、またお百姓の勞苦に對して餘りに氣の毒と、思はず通りすがりの田圃の畔に、念佛を唱へて「雨降らせ玉へ」と祈らずに居れない氣持！これもやはり「餘りにも粗雑なもの」でせうか。(京都府・園都町・正木榮之輔)

(答)

椎尾博士の言はれたのを亂用するな」と言ふことであらうと思ひます。随つてあなたの御質問は的はづれであります。御質問の祈りは公益の爲、國益の爲、國民の爲の祈りでありますから

「粗末な少事」ではありません。

死後と法要と蠟燭

(問)

一、靈が肉體を離れてから何んな順路を経るものでせうか。

二、枕經から滿中陰百ヶ日と順に行ふ讀經法要の意義を御示し下さい。

三、愚婦にもわかり易く書かれた本がありますならばお手數ながらお教へ下さい。

四、お蠟燭が自由に求められませんが、お明しの功德を教りたうございます。

五、忌日に新しい蠟燭のない場合、一度ともした物を使ふのと蠟燭なしと何れがよろしいでせうか。(富山縣・寺塚原・佐伯禪祐)

(答)

一、「肉體を離れた」など云ふ品物見たやうな「靈」のことは一向存じませんので御返事が出来かねます。

二、枕經から一七日乃至百ヶ日と讀經することは、遺族の務めであります。お經には大體一週間目に、後生がきまると言つてあります。

す。一七日できまらなければ二七日目、乃至七々目できまるさうであります。そんなことから七日七日の追善供養を行ふことになつたのであらうと存じます。

三、御注文に應じた本はありませんが、然し大體信仰を本で判らうとすることは無理ではないでせうか。

四、お蠟燭が無ければ止むを得ませんでせう。然し全然無い筈はありません。さがせばまだあります。中外日報などにも廣告が出て居りますから、そこへ御注文なさつてもよろしいでせう。毎朝の御燈明ぐらゐは少し節約して使へば將來も、間に合つて行くと思ひます。然し菜種から御自分で油をおしほりになるのも結構でせう。次におひかりは私達の方へ廻らし向けられるもので、佛様から與へられる光明と御考へ下さい。委しくは「淨土宗讀本」を御覽願ひます。

五、一度ともしたもので差支へありません。なしでやるよりもよろしいことは申すまでもありません。



哨戒飛行機に耳澄ましつゝ

山田 靈 林

目を覺ましたときは、既に哨戒飛行機が帝都の空を飛んでゐる音がしてゐた。室の様子がまるで違つてゐるやうな氣がするの、よく見返して見ると、今見てゐた夢からまだ覺めきつてゐなかつた爲であつた。私は母の夢を見てゐたのであつた。

夢の中で母に私が「伏鉦が應答したのですよ」といつたところ、母は何ともいひやうのない顔をした。その顔が夢から覺めた私の心に、猶ほはつきり殘つてゐた。

伏鉦——それは飛騨高山の淨土宗のお寺で、私の幼いころ朝の二時からカンカン叩き鳴らされた鉦である。お朝事のお念佛のとき叩かれたのである。この伏鉦の音がどんな朝でも、僕の耳に聞えないことのないやうになつたのは、私が七つの春その寺に

貰はれて行つた翌くる朝からである。

そのお寺は私の生家からは極めて近く、裏の畠庭を通つて、四五間しかないぼたを上れば、直ぐお寺の境内であつた。お寺はたいして大きくはなかつたが、和尚さまのからだが大きく、徳望がまた高いので有名であつた。

私が五つ六つの頃から私をかはいがつて、町に往くといつては立ち寄り、歸るといつては立ち寄りして下さつた。赤い袖衫のついた墨染のかはいい袷衣をこしらへて來て、私に著せて貰はれたのは、私がお寺に貰はれて行くとも行かぬとも未だきまつてゐない目であつた。

七つの春いよいよ貰はれて行つた。歲月は流れて、和尚さまは亡くなられた。私は

禪家に修行することになつた。そして私が四十幾歳となつたある日である。母重態の電報に驚いて、東京から飛んで歸つたときは、既に危篤状態であつた。しかし夜のめも寢ずに看病しつゝけてゐる弟や妹はそれを認めず、必ずなほるといつてゐた。果して一日とたち二日とたつ間に、意識も恢復し流動食も喉を通るやうになつた。弟達もほつとして休み、私一人看病してゐると、お寺の鉦が鳴り出した。「お寺の鉦が」と私がひとりごとのやうにいつたそのときであつた。母は俄かに褥から起き上らふとするので、驚いてそれを制しお醫者さまが絶對安静にと仰しやつてゐるのですよと、きつくいふと母はそのまゝ靜かに眼をつむつて休んでしまつたが、何か心にや



るせないものを感じてゐる様子であつた。それから十日とたたぬ中に、母はすっかり元氣になり、食事もちど平生のやうになつた。そして幾時かを経てからであつた。朝のお寺の鉦を聞きながら、私は母に聞いた。この間の朝お母さんは頻りに起き上らうとなさつたが覚えてゐますかと聞いた。母は黙つて肩をふさいでゐたが、しばらくしてからただ一言「鉦を聞くとおかあさんは寝てゐられなかつた」といつた。その聲は涙にふるへてゐた。

鉦を聞くと寝てゐられなかつた、と母がいふそれは、十日ほど前の朝の時のことをいつてゐるのでなく、私がお寺に貰はれて行つて以來のことをいつてゐるのであることが私には感ぜられた。私はお寺に貰はれて行つてから毎朝々々和尚と一緒に朝二時に起きて、お朝事のお念佛を唱へたのであるが、お念佛のことよりも母のことで、心はいつも一ぱいであつた。飛んで歸りたくて泣き出したこともあつた。お念佛を唱へながら、母が妻の降る中をそつと上つて來て、御水堂の障子の外で拜んでゐる夢を何度も見たことがある。それは決して私の夢だけでなかつたのである。私が泣き聲でお念佛を唱へてゐるその姿を、様側からのぞき見た母の心は、どんなであつたであらうか。

母にも私にも慮られない鉦である。この鉦が應召したと聞いて、母が淋しい顔をするに不思議はない。鉦の應召を夢でなく現實に弟からのたよりで知つたとき私も淋しい思ひに涙まざるを得なかつた。

しかしその日であつた。ある會合に行くとき鉦や梵鐘の應召について、よく得心してゐる方があつて、その金貨の上等であること、それが直ちに重要な武器に造り直されて、偉大な役目を果たすことなど、手に取るやうに話して下さつた。

鉦が偉大なる役目を果たすために、應召したのであると知つて、何ともいひようのない暗れやかな力強い氣もちに充たされた。

それ以來、哨戒飛行機の音を聞くと、鉦のことゝも應召のことゝもつかぬ肅然たる氣もちになつて、耳を澄まさずにゐられないやうになつた。

母が今日存命であつたならば、哨戒飛行機の音を聞く毎に、戦果の報道を聞く毎に鉦の音を聞いたときのそのやうに、起ち上つて御奉公精進をしたであらう。

母が存命の頃は、高山町には伍長さんの高長さんだのいふものがあつた。今日の陣屋や町會の組織があつたのである。知恩院門山下現有大僧正が舊高僧になられたとき、おつかへした看護婦は、私の生家の隣組に生れた娘で、私の母が自分の子のやうに面倒を見てゐた。その娘が大僧正のお徳を感ずるがままに、私の母に話したのを私が晝中休暇に歸省したとき、母から聞いて書き誌したことがあつた。

この娘に「鉦を聞くと寝てはゐられない」といふ述懐を私の母がしたとか、母の死後に聞いたことがある。



ビルマの話 (四)

陸軍報道班員

北 林 透 馬

河を越へて、いよいよジャングルに入る。

ジャングルと言ふのは、ひと口に言へば、大きな簾だが、この簾がとてつもなく大きいのである。

何しろ、何百年も何千年も若しかしたら人類などが地上に現れて来ない何萬年の昔から太陽と水と季候にめぐまれて、無暗矢鱈に生え育ち、生ひ茂つた樹木であり、それが長い間には、枯れもするし、折れもするし、折れた奴が地面に倒れ、腐つた上に、また新しい奴が折れてきて、また腐る、と言ふやうなことを、何百年も何千年もくり返してゐるのだから、地面と言つても言はば枯れた樹木と腐

蝕土との合の子みたいなもので、まつたく足の踏み入れやうが無い。

乾燥したところは灰を踏むやうに、ひと足毎にずぼり、ずぼりと足菌が埋つてしまふし、濕氣た場所では、まつたくの泥沼である。太陽の光もろくに射さないやうな、樹立の深いところは、直射日光にさらされることは無いが、その代り風がまつたく通らず、大きなむし風呂にでも入つてゐるのと同様で、湿度のたかい暑さと云ふものは、やりきれたものには無い。

こんな所だから、化膿菌や腐敗菌が多いのだらう、ちよつとした傷をしても、すぐに膿むし、ものは直ぐに腐つてくる。

一番困るのは、やまびるの多いことで、兵士

たちは、無論足を大事にし、靴もはいてゐれば、卷脚絆も嚴重に巻いてゐるのだが、幾日も幾日もジャングルのなかを歩いてゐる内に何時の間にかやまびるが、卷脚絆のすきまからはいりこみ、ズボンの間をもぐつて脚に吸ひついて血を吸ふのである。

吸ひつかれたあとは、ばくりと大きな傷になり、化膿して、血はとまらず、傷はなほらず、まことに厄介至極なことになつてくる。サソリもある。カブトムシかザリガニに似た形をしたサソリは、うつかりしてゐると、襟首にももぐりこむし、靴のなかへも入つてくる。

友人の一人が、このサソリに手頭を喰ひつかれたので、これは不可ん、と思ひ、悪くす

ると死ぬかと思つて心配したのが、何う云ふわけか其時は、手がすっかり腫れあがつてし



(寫眞説明)

齒齲車が故障を起して動か

なくなつたりすると、すぐにビルマ人が来て手傳つてくれる。右の方に頭に衣をかぶつた人は、ビルマの坊さんで、丁度達磨大師そっくりな姿をしてゐる。僧衣は黄いといふよりは赤褐色に近いものである。

まひ、四〇度を越す高熱が二日ほどつゝいたが、間もなく熱も下り腫れも引き、二週間ほどの後には完全になほつてしまつた。

サソリの毒に對して抵抗の強い體質であつたのか、或ひはまたそのサソリの毒が弱かつたか、醫學的なことは解らないが、とも角これは不幸中の幸ひとも言ふべきであらう。

蛇はたくさんある。世界中の毒蛇の何十パーセントかタイ國にゐる、と言はれてゐるやうに、その蛇が殆んど毒蛇ばかり、と言つて好いのだから、これも内地の蛇に對する氣持であたら大変なことになる。

バンコックには毒蛇専門の研究所があり、同時に病院も、經營してゐるのだが、若し蛇に噛みつかれたら、兎も角その蛇をつかまへて、直ぐに病院に馳けつけれ、と言ふお觸れが出てゐる。

つまり、蛇と云ふ蛇は毒蛇だし、そのまた毒蛇の種類が多いので、いきなり飛込んで行つても、どんな種類の注射を射つて好いか解らないからなのである。

併し、ジャングルのなかには病院がないから、まづ蛇に噛まれたら、腕一本、足一本、即座に斬り落す覺悟でゐなければならぬ。

青い小さな蛇で、此奴に土民が腫を喰ひつかれると、十五歩乃至二十歩あるかない内に毒が全身にまわつて死んでしまふ、と云ふ恐ろしい奴があり、土民はそれを「十五歩蛇」或ひは「二十歩蛇」と呼んでゐるが、さう云ふ奴に出逢つたら、まづおしまひである。

可愛なものには栗鼠があるし、獺がある。栗鼠は仲々素速いのでつかまらないが、小獺は何處か間が抜けてゐると見え、喰ひ残しの飯盒飯などにつられて、好く兵隊に捕へられ、その小さい獺を背囊に乘せたりして行軍してゐる兵隊がある。

何しろ、明けても暮れても、ジャングルの行軍は、獺でもつかまへるよりほか、何うにもやりきれなくなつてくるのである。

兎も角日本軍は、そんな風な、言はゞ「自然」を相手に悪戦苦闘しつゝ、漸く國境に達し、そのまゝ一舉にテナセリウム地區のモウ

ルメンまで押し出したことは、此文章の初めに書いたとおりである。

一月卅一日にモウルメンを完全に占領しサルヴィン河を渡河したのは八日だが、此處で一週間の時間を何うしても必要としなければならなかつたのが、これも前々號に書いたとおり、このサルヴィン河が容易ならざる河だからである。

河幅は一キロ足らずだが、流れが速く、満潮時には印度洋の波が押しあげて海嘯現象が起るから無論、架橋は出来ない。船で渡すにしても、干潮の時には、河の水が激しいので容易にはゆかない。結局満潮が最高潮に達し、これが干潮に變らうとする時、時間にすればほんの三、四〇分の間丁度巧い工合にバランスが取れ、ひどく水面のおだやかな時間がある。その僅かの時間をねらつて渡し船が渡るのである。

渡し船と言つても、隅田川の河蒸氣よりは餘程大きな、吃水線の淺い汽船だが、この運轉士はビルマ人である。

敵前上陸は、日本軍の得意とするところで世界中の何處の軍隊もやれないやうな勇敢極まる渡河を平氣でやるのが皇軍の特色だが、何うも此時ばかりは少し困つた。

今言つたやうに、河を渡る時は一日に二回しか無く、而もその時間はちやんときまつてゐるのだから、對岸にゐる英國兵共はその時間が来れば戦車から、野砲、機銃、飛行機まで總動員して、待ちかまへてゐる。

まさかその火線のまんなかへ船を出すことは、勇敢と云ふより無謀に近いし、犠牲が多いわりに效果の無いことは解りきつてゐる。其處で日本軍は、此處から今にも敵前渡河をやりさうな態勢を見せておいて、巧みに敵の注意を惹きつけておき、夜陰に乗じてサルヴィン河を溯航し、五〇キロ北方のバアンに上陸し、此處から、敵前上陸をやつたのである。

無論、満潮の波に乗つて溯航したのでありバアンに達した時、河水は丁度バランス状態になつた。此處で一齊に渡河が始つたのであ

る。

この時のビルマ人たちの、日本軍に對する獻身的働力に就いて、書き落すことは出来ない。船に乗つて、水路を案内したのは多年この河で働いてゐたビルマ人たちであり、そのうちの幾人かは敵前上陸にも参加し、つひに一人の戦死者をさへ出したのである。

英國軍がモウルメンを逃げ出す時には、まつたく知らん顔をしてゐたビルマ人たちが、日本軍来ると聞かや、みんな飛び出してきて進んで協力したのは何故だらうか。

ビルマ人たちが、東亞新秩序の新理念をつきり把握してゐたからであらうか？皮膚の色が似ており、容貌が似てゐる日本人に親しみを感じたからであらうか？

南方地區では比較的に教育が普及してゐると言はれるビルマ人ではあるけれど、さう難しい理屈を直ぐに理解することは困難であらうし、日本人に似てゐる支那軍に對しては非常に劇しい憎惡を持つてゐるのだから、以上の二つの理由は、どうしても此場合あてはま

らないやうだ。

ビルマ人たちは日本軍に協力させた、一番直接的なものは、他でもない、實にホトケサマなのである。

ビルマ人は一千五百萬人のうち一千四百萬人が佛教徒であり、三萬人の坊さんがゐる。

ビルマ人の生活から、ホトケ様を引き離したら、後には何も無くなつてしまふだらう、と言ふくらひに、生活のすべてが、佛教にむすびついてゐるのである。

ビルマ人は、自分の働いて得たお金を、殆んど全部ホトケ様に差出してしまひ、暇があ

法 影

柴 田 佑

虚無か？ 實在か！

もがきて模索の裡に

ふと見しは

法の影に映れる

大悲の御姿

珠數もて拜す。

とバゴダへ行つて、ホトケ様を拜んでゐる民族なのである。

そのホトケ様を、キリスト教徒である英國兵は、偶像だと言つて足蹴りにする、イスラム教徒である印度兵も、無論、同じである。

ところが日本兵は、ホトケ様を大事にすること大變である。田舎の素朴な家庭に育ち、幼い時からお寺まゐりをし、何かの折には坊さんのお經を聞き、ホトケ様を拜禮してきた日本の兵隊さん達は、バゴダのホトケ様の前を黙つて、素通りすることが出来ないのである。

誰が命令せずとも、また誰が見てゐなくても、兵隊さんは必ずホトケ様を拜んでゆくしなかに花を上げたり、お賽錢を上げたりする者もある。

若し佛像が、倒れてもゐれば、それを町に起し、拜んでゆくのだから、これは印度兵や英國兵と大變な違ひである。

「ホトケ様を拜むやうな人に、悪い人があるわけがない」

これが、ビルマ人の氣持なのである。

英國はビルマ人に對して、どんなデマをとばし、どんな日本軍の悪口を言つたか知らないが、事實自分の眼で、ホトケ様を拜む日本の兵隊の姿を見ては、もうビルマ人は黙つてゐられなかつたのである。

「日本こそ、たしかにビルマの本當の友達であり、兄弟であり、救ひ主にちがひない」ビルマ人が進んで日本軍に協力を申し出て來たのもちつとも不思議はなかつたのである

盛大に催された

中村師を圍む會

中村辦康師が芝増上寺執事長に就任されたのを機會に、淨土宗東京教區教務所、日本女子會館並に本會が主催で六月十八日午後二時から増上寺總和殿に「中村師を圍む會」を開催、朝來の豪雨に拘らず廊下にあふるる來會者があり盛大だった。尚栗本俊道師司會のもとに記念品の贈呈、里見達雄、吉田絃二郎兩先生の挨拶、中村師の答辭があり、次いで來會者から多數有志の祝辭希望その他があつて午後四時散會した。

筆漫教宗

とんちん

天真文



物語

ノン坊 畫

新學期も了つて、お墓や境内の青々とした樹木に油断、みん／＼蟬が聲を競つて耳を聳せんばかりの、地の火照で目眩ひを感じる様な暑い日の續く夏休みが來ました。

學校のお友達に夫々「此の夏はお父さんと山へ」僕は兄さん達と海岸の遊戯の家へ」と喜々として楽しい夏休みを夢見てゐました。こんなお友達を思ひ浮べると豚珍はとても羨ましくなりません。

が、それにはお構ひなしに、薄暗い霧のかかつてゐる早朝からエヘン／＼と老師の暖拂ひが障子越しに聞えて來ます。

起きなければならぬと思ひ乍ら、眠け盛りの豚珍は半ばむくれての狸寝入りです。

エヘン／＼と亦暖拂ひが幾度か聞えて來ます。吾愛弟子にも起きよと云ふ事の云ひ出し

切れぬ老師の暖拂ひは、豚珍にとつて起きよと云ふ暗示である位は良く分つてゐるのです。が、どうしても起きられないのです。

いよ／＼諦めてか老師は自ら本堂の戸を開けて鉦を鳴らし始めます。

他の子は皆海へ山へと喜々として行くのにせめて夏休み位ゆつ／＼寝かして呉れても良かり相など思ひつゝも、平素目の中へ入れても痛くないと云ふ程可愛がつて呉れる老師の事を思ふと心をとり直して眠い目をこすりつゝやつと起き上るのです。

燃え残りの蠟燭の下で「ガシヤクシヨゾウシヨアクゴウ」と老師が平素と變つた嚴然たる聲で云ふと「ガシヤクシヨゾウシヨアクゴウ」と後を付けるのが彼の仕事です。

薄暗いロソクの下でシーンとした本堂で佛像を仰ぐと、晝間見る佛像とは違つて何となく自分の心が見透かされてゐる様な氣がして、身も心もしまる様な氣がします。

ゆら／＼赤い灯の焰に、老師の顔が燃えて莊嚴な別人の様な氣がします。

珍文漢文な何の意味も分らぬお經を覺えるのも仲々樂ではないと彼はつく／＼長嘆息するのです。而して済んだ後はきつとホットするのでした。

朝のおつとめが終つて、曉の靄、次第に斜けて、新鮮な朝風が緑の深い蔭の濃い四邊の植込にソヨ／＼と流れ込んで、那方這方にももう降り注ぐやうな霪時雨、青草の薙は風に連れて絶えず匂つて來る或る朝の事、老師は靜かに豚珍に聞ふのでした。

「豚珍や、お前は御本尊様は有難いと思ふかい」

「ハイ」

「有難くないと思ふかい」

「ハイ」

「どつちだい」

「ハイ」

と云つて、豚珍はキョトンとした顔をしてゐます。

さつきから御供物の方に視線の行つてゐる豚珍の目付きを見て、成程と老師はハタと膝

を打つて、之は佛様から戴いた御菓子、粗末にせず戴くんだと有難様に押し願いて、叱りもせず脈珍に下げて呉れました。

御供物に視線を向ける規則(?)を造つたのは其の頃がそも／＼の初めです。

しかし、脈珍のおやつには、不自由しませんでした。が、門前の遊び友達が『あたいにも呉れよう』と僕達にも呉れないと遊んでやらないよ』と云はれると、お菓子の配給に事欠いて遊んで貰へない事が淋しい氣持になるのです。

思案にくれた擧句、考へた脈珍、棚に上つてゐる自分の貯金箱に目を附けはじめました。

門前の坂を降りると坂下は賑やかな町で、夕立でも有つた晩は、店々の青い灯、赤い灯



が水溜りに映り合つてそれは綺麗です。日がとつぷり暮れて涼風が浴衣の袖を拂ふ様になると、金魚屋、植木屋、西瓜屋のせり

賣等と夜店が、ずらつと並んで、浴衣がけの夕涼みの人達で肩をすれ合ふばかり、小さい者も其のお祭りの様な賑やかさに胸をワク／＼させるのです。

人込を縫ふ様にして露店の店先に立つた脈珍、

老僧「トテンチや、お勤めだよ」

懐のお貯み焼、蜜梅水、蜜まめ、ところてん、饅頭等と手當り次第腹詰め込んで豪遊(?)を決め込みました。

周作の一夜傳授

安政元年の春のこと、當時劍士として有名だつた千葉周作が六十一歳といふ齡のせいか風邪氣味で臥せたゐた。ある夜のことけたたましく門を叩いて訪れた者があつた。お茶道春齋といひ、醜くない殺され方を、先生にお教へ願ひたい』といふのであつた。周作は夜更けながら早速一室に通してそのわけを訊ねた。すると春齋のいふには、

「主人公の急の御用で駿河臺まで来る途中、護持院ヶ原で浪人の辻切に遭つたので、主命を果たすまで待て、必ず歸りには斬られに來ると約束しました。私も丸腰の人間とはいへ大名家に仕へる者、命が惜しくて逃げたとあつては主君のお名にかゝはります」

といふのであつた。周作は「仲々面白い氣象である」と感心し、静かに起ち上ると一刀をスラリと抜き、諸手大上段に振りかぶつて眼を閉ぢ、この通りに構へてみよ」と春齋に刀を渡した。脚の開き方、力の入れ方、呼吸

貯金と云つてもたつた五十錢そこ／＼ですが昔の小孩には使つても／＼とても使ひ切れません。

でもどうした事か、いくら喰べても喰べてもいつもの旨さは有りません。

「豚ちゃん、さう使つて叱られやしない」と金ちゃんに心配相に云はれた時、ドキンと胸を不意に衝たれた様に無斷で貯金箱を解放した事がとても小さい良心に咎められて急に悲しさが込み上げて來ました。

とんぼ釣の子供が境内に見えなくなつて方々の軒先に灯がともる頃迄歸らぬ豚珍の身を心配して門前を行きつ戻りつしてゐる老師の姿を見つけると豚珍は、ワアツと泣き出しました。

豚珍の姿を見ると心配してゐた老師は安心した様にそして又心配相に

「御飯時にはさつさと歸らなさいいけないよ、それにしても、どうしたんだい、いぢめられでもしたのかい」と優しく訊き直すのです。

そう云はれると殊更に悲しく良心に咎められて、遂一肉狀して泣き喚りをしい／＼詫言しました。

「まあ豚ちゃんが!!」

「豚珍さんも悪いけど大體遊び相手が悪いですよ」

と寺の者達に白眼視される中にも老師丈は「教育一圖で満足な小遣もやらずにゐたワシが悪かつた。悪いと思つたら二度とするでは無い、さつぱりと素直に懺悔する、其處が豚珍の値打ちだ、なあ一生忘れるなよ、ヨカヨカ」

と豚珍を抱き上げて煙すりさへして愛撫して呉れるのです。

何を喰べても、どれ程お金を使つても、隠れてする事位、拙らない、面白くない事は無いとしみ／＼感じさせられ乍ら、今泣いた鳥が、もう笑ふたと云ふのでせうか、懺悔した後の晴々しさに潤みのある目を直に輝かす無邪氣な豚珍です。

の使ひ方をよく説明してから、

「よろしいか、身體の何所かい冷やりつとしたと思つたら、ただ打ちおろせばよい。必ず醜くない死に方が出来る」と教へてやつた。

春齋は周作からその一刀をかり、再び護持院ヶ原に來た。浪人は石に腰を下して待つてゐた。

「坊主、きたか」

「約束通り斬られにきた。さあ斬れ」

春齋は教へられた通りの構へを取つて眼を閉ぢた。浪人も刀を抜いてデヂリット寄つた。しかし、しばらくして浪人は、

「この坊主なかなかやるわい。相討ちになつてもつまらぬ」

といひながら刀を收めて去つてしまつた。

その後周作は人に語つて

「相手に斬らうの、自分が生きようのといふ念がなかつたから、春齋には無想流の眞意が立所に會得出來たのだ」といつた。

歌 壇

山野喜久代歌



兵 車 辻垣彌太郎

もののふはかくこそあれと南の
空天かけり元帥の死ぬ

(譯) 山本元帥の悼歌が多數寄
せられた中これを一位にとる

表面に哭く、憤る、と云ふ言
葉を現さないで、武人の最高
の死を讃歎し、深い感動を抑
へて歌つてゐる。

京都府 川端 俊雄

國こぞりふるひたてるをおほけな
しみ國の恩に病やしなふ

(譯) 傷病兵の歌、その謙抑な
つつしみ深い心持と時局に對

して燃え上る熱情との交つた
佳作

鹿兒島縣 本村 益男

兵の父三年國を守り老いぬれど今
年もうれし國植を終りぬ

(譯) 應召した子に代つて國州
を打つ老父の屈せぬ旺盛な意氣

を見たまへ

静岡縣 伊藤 圓照

俳 壇



大田耳動子選

京都市 福島孝治郎

山吹に湯豆腐亭のまぎれをり

東京都 井原しま子

七面山御來迎

雲海の極み眞白く日の出づる

岩國市 長岡 自朝

別府より日焼けし顔や宇佐詣

高知縣 横山 亮圓

徴兵検査うたがいのなく甲種かな

青森縣 丸尾 傳山

竹の子の芯まがらぬを買ひにけり

兵庫縣 津下 鶴山

傷 療 所

薬包溜めて句帳や梅雨の兵

同 玉井 利一

つれたちし人の目焼けたのもしく

大阪 豊岡 時天

碓橋の義足にかたし花あやめ

明石市 山本多可子

せくらぎの木の間にふかく藤の花

金澤市 堀 純雄

青森若葉病葉窓せまくなりけり
東 京 清水金鈴子

ほこりたる足なげだし蛸蚪の水
静岡縣 伊藤 圓照

ありし國の父の文字なる種袋
北海道 高島喜八郎

藤切の川と並びて登り道
東京府 萩原 通孝

病みてゐる人に鳴くらん閑古鳥
京都府 今江 清一

閑さは庭に舞ひたつ夏の蝶
大阪市 堀田 俊光

表の花さかりの庭となりゐたり
東 京 川田美津子

征かしめてはや一月の麥を刈る
同 鈴木長春園

由あやめ夕明けて来りけり
名古屋 藤臺 芳月

春宵の蒼龍は靜かなる
東 京 小山 しづ

諏訪湖にて
大分縣 橋本 安江

湖渡る東風産雲のまともなる
浮雲の一つに麥の穂を穿む

紙面の都合上以下五十句は選者主幹
の随筆誌上に發表させて頂きます

投稿規定 官製ハガキ一四二句以内とし
「春土」編輯部郵便係あてに送ること



求道の心即ち信心

法然上人法語解説(其二〇)

中村 辨 康

法 語

さて仇の城などに籠められて候はんが、辛くして逃げてまかり候はん道に大きな河海などの候て渡るべきやうも無からん折、親のもとより船をまうけて迎へに給ひたらんは、差しあたりて如何ばかり嬉しく候べき。これがやうに貪瞋煩惱の仇にしばらく三界的樊籠にこめられた我等を彌陀悲母の御心ざし深くして名號の利剣をもちて生死のきづなを切り、本願の要船を苦海のなみに浮べてかの岸につけ給ふべしと思ひ候はんうれしさは觀喜の涙たもとをしほり渴仰の思ひ肝にそむべきにて候。

せめては身の毛竈立つほどに思ふべきにて候を、のさに覺召し候はんは本意なく候へども、それもとまりにて候。罪つくることを教へ候はねども、心

に染みておほえ候へ。その故は無始よりこのかた六趣にめぐりし時も、形はかはれども心はかはらずして色々様々につくり習ひて候へば、今も初々しからず易くはつくられ候へ。念佛申して往生せばやと思ふことはこの度初めてわづかに聞き得たることにて候へば、屹とは信ぜられ候はぬなり。

そのうへ人の心は頓機漸機とて二しな候なり。頓機は聞きてやがて悟る心にて候。漸機は漸う々悟る心にて候なり。物詣などを候に、足早き人は一時にまゐりつくところへ、足をそきものは日暮しにもかなはぬやうには候へども、まいる心だにも候へば遂にはとげ候やうに、願ふ御心だにわたらせ給ひ候はゞ、年月を重ねても、御信心も深くならせおはしますべきにて候。

〔拾遺和語燈錄卷下往生用心〔法語抄七九、八〇、八一〕〕

解 説

この御法語には、次のやうな三つの問題が含まれて居ります。一、來迎を受けるはうれしきこと。二、往生が痛切に思はれないこと。三、漸機の人でも擔ます進むべきことといづれも大切な問題です。

一、來迎 不來迎

來迎なき念佛はあり得ませんが、眞宗教義では不來迎を云つて居ります。理由は「平生業成」即ち一旦信に入つた限り往生の業は成就して居るから、改めて臨終の來迎を待つ必要がない、と言ふのであります。一應尤のやうに聞えますけれども、それは來迎と念佛とを別に考へたからで必ず不來迎でなければならぬと言ふのであるまいと思ひます。往生は不來迎でも差支へない、淨土宗などのやうに臨終に必ず來迎がなければならぬと斷定しなくともよいと言ふのであります。

然し私達から申しますと、それもまた一つのこだはりであらうかと思ひます。即ち念佛することは如來の御名を呼ぶことですから「即聲即魂」と言ふ言葉のやうに如來の尊

容が感ぜられない筈はありません。例へば茶碗と言へば茶碗が思はれるのと同じであります。それが即ち平生の來迎であります。唯だ平生は切實でないから感じがにぶく、臨終は切實した氣持ですから痛切に感じられるので、それを平生と區別して特に「來迎」と云つたのであらうと存じます。

たとへそれがよし觀念的のものでも來迎を得るの嬉しさは不來迎を強調する眞宗人に取つても恐らく同じやうに嬉

實 話 忠 犬 の 斷 食

犬は伶俐で忠實で、己を愛する飼主や家族をよく知り分けてゐる。又人の言語を理解し命令を守り鑠に服する。己に課せられた任務を十分に理解し、これをなしとげる爲には身分を顧みぬ崇高な意思を持つてゐる。銅像まで建てられた忠犬ハチ公は餘りに有名であるが、主家のためなら死を賭して盡す犬の美談はその他にも澤山にある。ここに秋田市保戸野八丁新町西野幸八郎氏の愛犬「玉」も亦珍しい忠犬であつた。

「玉」は前の飼主佐藤山三郎氏が出征したので西野氏が譲り受けた秋田犬牝七歳である。家人からはこの上なく可愛がられてゐた。まだ寒さの酷しい正月廿四日のこと西野氏は義例で「玉」の頭を撫しながらかういつた。

「玉よ、おまへは七年もの間よく家のために働いてくれた。だ

しいことであらうと存じます。この宗教體驗の嬉しくない信仰人は一人もない筈であります。若しあつたらそれは念佛の信者ではありません。

二、痛切でない往生心

これは數異鈔にも出て居る問題であり、昔も今も人と我も同じやうに反省させられる問題であります。大東亞戰爭が勃發して以來具體的な往生思想がはつきり認識されるやうになりましたので、もうこの矛盾は解消されてしまひました。

つまり、これを第一線の將兵の氣持にたとふれば「大稜威の中に生きる」と云ふことが、すなはち「日本的往生」であつて、必ずしも身體の死を意味するものではありません。それと同じやうに念佛往生も本當に往生の氣持が判明すれば眞實の往生を喜ぶことが出来るのであります。

顧みまするに、大東亞戰爭以來私達の人生觀は變つてしまつたのであります。以前のものは個人主義で自分の完成が最高の理想でありましたから、佛敎語で申しますならば「成佛」が目標であつたのですけれども、今は此の身このまゝに盡忠報國すればそれが最高の光榮であり最高の名譽

がお國は米英と決戦に決戦を續けてゐる。従つて飯米も段々に少なくなつてきた。本當に可愛想だが、これ以上おまへを飼つてゆけなくなつた。一つ覺悟をしてもらへまいか」

「玉」は主人の言葉が解つたのだらうか、その日から何をやつても食ふなくなつてしまつた。牛乳やその他普段の好物を與へても見向もしなかつた。

かうして絶食すること四日、五日とすぎ、六日目卅日の朝、遂に「玉」は大小屋の中で死んでゐた。しかも口元から血汐が滴つてゐた。よく見ると小屋の寢藥と一緒に舌を噛み切つてゐた。おそらく玉は絶食して死に切れず舌を噛んで自殺したものだと思はれる。

(秋岡市保戸野北鐵砲町來迎寺後藤愼隨氏歎)

椎尾辨匡・中村辨康序 林 靈 法著

新刊 法然上人を憶ふ (本會で取次ます)

B 6 版四四〇頁 實費三圓(送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつつた。

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

であり、無上の喜びでありますから、言はば往生的な氣持であります。ですから私は之れを往生主義的人生觀と名づけて居るのであります。

これはとてもすばらしい一大轉換であります。この一大轉換に依つて我が國民の上に宗教上の「往生」思想が漸次はつきりして来るものと存じます。随つて法然上人の御教が段々諒解されまして、更には法然上人の教こそ、眞の日本の宗教であることが明らかに成つて參ることと信じます。

三、頓機と漸機

ウイリヤム・ゼームスの「宗教經驗の種々相」に依りますれば、強い宗教經驗に依つて一度に人格が轉換した人は多く「小聖者」に留まつて居ると言つて居ります。佛教の方で申しますと「お上人様」として拜まれるほどの尊い方々ではあります、謂ゆる「頓機」として急激に變化した感情の強い激情家でありますから、その宗教經驗が何時までもこびりついて居て、そこに固執して居る傾きがあります。無論そこから出發してドン／＼發達して行く人もありますから一概には言へませんが、多く中途に止まつて居る傾向がありますからゼームスも「小聖者」と評したのではな

らうかと存じます。

之れに反して漸機の人は多く常識的でありまして批判力を持つて居りますから、急激な精神轉換はありませんが、然し徐々に進んで行く人で、かゝる人の方がむしろ確かであります。

「願ふ御心だに渡らせ給ひ候はゞ、年月を重ねても、御信心も深くならせおはしますべきにて候」

との御法語のやうに、求道心さへ失はず念佛さへ捨てなければ、必ず信仰は深められて行くのであつて、それは丁度阿彌陀佛にそむる心の色にいでば

秋のこすゑのたぐひならましの御歌に示されるやうに、漸々に秋の紅葉が霜にあつて色を濃くして行くのと似て居るのであります。

一度に急に染まつた信仰は、また一面何かの事情でさめ易い事實に接します。この意味から云つて頓機の人よりも漸機の人の方が確かであると存じます。

されば私達としては何處までも「求むる心」を捨てゝはいけません。一生を貫いて求め求めて行くべきであります。イヤ本當は「求道心」こそ眞實の「信心」に外ならないのであります。

理事會を開催

去る六月二十九日午後三時から芝罘芝公園明照會館樓上で本會理事會が開催され、左記各事項について協議が重なられた。

昭和十七年度收支決算報告

昭和十八年度豫算案

昭和十七年度事業報告

昭和十八年度事業豫定

この内今年度事業については種種意見の開陳があり、本會に對して時局の發展に應じますます活潑なる活動をなすべきであるとの要望があつた。なほ當日の出席者は次の通りである。

會長 里見謙雄

理事長 中村辨康

理事 岡本貫玉、竹石耕善、

安井大學、渡邊眞海、高瀬永殿、

福田有誠、杉浦演順、佐藤良智、

本部員、道瀬幸雄、池田閑基、

村瀬秀雄

編輯後記

◇本號を以て百號となりました。

數多い會員の中には西化されたり

出征されたりした方も可成りあり

ますが、創刊當時の會員が殆んど

現在まで愛讀されてゐることを思

ふと、百號を迎へたかげに並々な

らぬ多くの方の御恩を感じます。

◇またかつて當所で動いてゐた本

部員の努力に對しても深甚なる敬

意を表します。この方々の中には

歸還された者もあり、現に辻重光

東慈道、川端祐輔の三氏は前線で

活躍されてゐます。

◇私達はこうした御指導や御援助

や御盡力に逆かぬやう心掛けなが

ら、われわれの信仰心をますます

昂揚し堅固にしてお國に御奉公致

したいと念願するばかりです。陸

海軍大臣から四十三通の感謝狀を

頂いてゐるのも全く各位のおかげ

に外なりません。

◇吉田絃二郎先生夫人清光院さまが西遷遊ばされて早くも七年になります。去る七月一日本郷講安寺

で池田立基師導師となり七回忌法

要が厳修されました。この間一時

間餘、終始合掌したまふ姿勢を微

動だになかつた先生の姿に一同

感動いたしました。

◇山田靈林先生から久し振りに玉

稿を頂き深講いたします。

◇和田正系先生のお宅千葉縣富浦

町には庭から掘出されたお地藏さ

まがおまつりしてあります。そし

て多くの參詣者があり、この程お

賽銭金三十圓を「慰問淨土」資金

にと御寄附下さいました。

◇「淨土宗讀本」が品切れになつ

て久しいのですが、今以て可成り

の御注文があります。同書の再版

も只今のところ何時出来るか判り

ませんので、右御承知置き願ひま

す。(村瀬)

淨土 八月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和十年七月五日印刷納本

昭和十年八月一日發行

(定價十二錢)

東京芝罘芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野正順

發行人 眞野正順

東京芝罘芝公園十五號明照會館

印刷人 赤尾光雄

東京都牛込區西町七 (東京二)

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元 東京都神田區渡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人廟仰會

東京都芝罘芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

會員番號二三〇〇〇七

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

一ヶ年 (送料共)

強腦・強精に光明丸



腦病全身神經
系諸病腦溢血
鼻耳小心恐怖
腦毒症神經痛

主治效能
 腦病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、ヒステリー、てんかん、ヒキツケ、小兒麻痺、腦膜炎、腦毒症、腦溢血、高血壓、半身不隨、心悸亢進、耳鳴、逆上、頭痛、頭重、肩首コリ、(性)の鼻病、耳病、多夢惡夢、頭腦力記憶力思考力減退、健忘症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂鬱症、取越苦勞雜念妄想、胃腸障害。

光明丸は腦疾病、神經系統の疼痛や硬直痙攣、動脈硬化、高血壓を治療し神經を鎮め腦毒や全身の病毒鬱血等を除去し血行を整へ全身を賦活し種々の不快苦痛なる症状を取去り眞の安眠に導き強腦強壯ならしめ頭腦力記憶力思考力を増強せしめ心から心身共に健全明快に導く即ち根本原理に即した合理的優秀薬であります。

試供薬と
説明書を
進呈

有名藥店、百貨店、
店ニ有リ品切ノ
節ハ直接本舖へ
注文をフ

價 目
 同 三 十 日 日 日
 十 七 五 三 二
 五 圓 圓 圓 圓 圓

(本 舖) 京都伏見いなり山 願 成 閣
 (代理店) 全國一流賣藥卸賣會社

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
 昭和十八年七月廿日印刷納本・昭和十八年八月一日發行

淨 土 第九卷 第八號

(停) 定價金十二錢 (送料)
 滿鮮等金十三錢
 外地定價